

第3回 文化財の英語解説のあり方に関する有識者会議の開催結果について（概要）

1. 開催日時・場所

- ・ 日時：平成28年2月22日（月）15:30～17:30
- ・ 場所：中央合同庁舎3号館8階 国際会議室

2. 出席者（別紙のとおり）

3. 配布資料

- ・ 配席図
- ・ 【資料1】文化財の英語解説のあり方に関する有識者会議の開催結果について（概要）
- ・ 【資料2】文化財の英語解説のあり方に関する有識者会議 報告書（案）

4. 検討会での発言等

事務局の挨拶後、資料1について連絡。その後、報告書案について事務局から説明の後、議論を行った。以下、その要約。

【アトキンソン委員】

- 報告書に掲載する事例はネイティブチェックが入っているものを使用すべき。

【平岡委員】

- デザイン性、どのようなフォントを使えばいいのかなどが盛り込まれているのは、とても目新しい。

【高野座長】

- トータルにコーディネートする視点が非常に重要だということもどこかに入れていきたい。

【萩村委員】

- 表示のデザインをもう少し工夫するといいいのではないかと考えている。二つの視点があって、一つは第1回会議でリンネ委員も指摘しているが外国の方が目を引くようなデザイン。もう一つは、第2回会議で指摘したことだが、文化財あるいは歴史の景観を崩さないデザイン。この両方が大事だと思う。

【野田委員】

- 日本文化のベーシックな部分についてのデータをどこで手に入れるかということ考えたときに、例えば空港、港、ターミナル駅、場合によっては海外の方が行かれるような寺社など要となる場所に置いていただくという視点を入れていただけるといいと感じる。

【高野座長】

- 個々の観光地が用意するのは重複した努力になるので、入口できちんと提供していくという配慮もよいかと思う。

【平岡委員】

- 野田委員の話はとてもよいが、本を読むことを面倒に思う人もいる。飛行機の中で到着前にビデオを見せる、日本文化についての紹介を5分か10分流すだけでも大分違うのではないか。

【アトキンソン委員】

- 複雑過ぎず、長過ぎないというのはその通りだが、文化財の専門家の視点ではない文章の作り方というのを、どこかで強調して欲しい。国宝なのか重要文化財なのか、何年に建てられたのかということは、専門家にとっては重要でよく見かけるが、そこから始まらない方がいいのではないかと思う。あくまでも歴史、文化的な意味合い等を中心にして、文化庁登録データのようなものを最後にするなど、目立たないようにしていただきたい。

【高野座長】

- 文化遺産オンラインでも日々そのことと格闘している。なぜ文化財になったのかという理由を聞かされても、普通の人にはぴんと来ない。
- 博物館や美術館が用意している目録は、ある意味では専門知識の規範にはなるが、あまりやり過ぎると専門的な差異ばかりが強調されてしまうので、その平易なものとしてベーシック文化財用語のようなものも合わせて用意されていくといいのかもしれない。

【長崎課長】

- ベーシックな用語をどのように簡単にしていくのか、統一的とまではいわなくても一つの型を作っていければと思っているが、神道のお考え、仏教のお考えに入ってくると、役所がなかなか立ち入れない分野になってくる。基本、前提であればあるほど悩んでしまい、突っ込み不足になってしまった。必要性は感じているので努力

していきたい。

- それをどのように展開していくのか、先ほど話に出た空港や湾岸に設置するといった話もどこまで突っ込めるのか、協力を要請できるのか、費用の問題等もあるが引き続き検討していきたい。

【野田委員】

- 私どもの社寺観光連盟のような、観光とか旅館といった連盟をクッションの機能として使うということが一つ考えられるのではないか。

【長崎課長】

- それも一つの方向性だと思う。その際、各関係者の協力がどの程度入るのがポイントになると思う。

【高野座長】

- 解説の手段・媒体・特性に応じた役割分担についてはどうか。

【長崎課長】

- 具体的な事例については調査中になっている。固定的にこれがグッドプラクティスだと説明するよりも、複数の様々な事例を示しつつ、この施設のここがいいということを、何個か例示しながら説明していくのがいいと思っている。施設の全てが素晴らしいというつもりはなく、それぞれの項目の中でここが参考になるというような引き方ができればと思っている。

【高野座長】

- ある事例をべったり紹介するよりも、ここについてとても評価できるというところをきちんと褒めて学んで広げていくというのが、ここでやるべきことだと思う。

【アトキンソン委員】

- 通訳ガイドのところにある、「旅行者の出身国との関係について付加」ということについて、神道はこういうものだと説明するのはいいと、個人的には思う。しかし、あなたの国は一神教であるとか、農耕民族であるとか言われると、あまりに浅いと感じてしまう。自国のことに関してそれほど深い知識がないにも関わらず、そのような浅いことを言われると、いいと思わない人もいるので控えた方がよい。
- 国際比較というのは、向こうの国に精通していれば話は違うが、あまり知らないのに日本でよく言われるような簡単な言葉を使うのは、パンフレットに出たりすると逆効果かなと思う。

【高野座長】

- 分かった気になってカスタマイズすると、逆になんだろうということになる。萩村委員などはいろいろ御経験されていると思うが、どうか。

【萩村委員】

- そのようなことに気を付けて、通訳案内士として稼働していかなければならないと思う。あるいはあまりよく知らなくても、例えばお客様の国に住んだことがありある程度知っているため、似たようなものがあったときに、あなたの国にも似たようなものがあったでしょうとか。日本に比べると歴史的にあまり長くない国のお客様も結構いらっしゃるので、16世紀以前というのが想像できないというお客様にも、大体何年頃にこのようなことがありましたというような、理解しやすいという意味での引き合いに、何かサンプルを出すことは各ガイドともやっているのではないかと思う。

【高野座長】

- ベテランの通訳さんは、もちろん気を付けているのだと思う。
- 人材の確保について、音声ガイドの製作の経験をまとめていただいたので、リンネ委員から話を伺いたい。

【リンネ委員】

- 人材の確保について、「なるべく文書力の高い専門知識のある方」の基準が非常に分かりにくいので、今までの経験として、英語に関してということであれば英語圏の大学院を出て、日本美術あるいは日本の歴史、日本文学、宗教学などで修士号以上を取得している方に基準を付けるのであれば、という話をしたい。
- 英語版のオーディオガイド作成の留意点について、最近のオーディオガイドには英語版や中国語版、韓国語版などがあり、非常に良いことだと思う。一方でいろいろな難点もあるので、それについて考えていきたい。
- 理想的なオーディオガイドとは、今までの話と同じだが、適切な情報量、長過ぎず、複雑過ぎないもの。目の前にある文化財をより深く見て考えるようにすること、せっかく目の前にあるチャンスを大事にすることが必要。書き方は教科書のようなのではなく、ストーリー性のあるものにする、書き言葉よりも会話的な言葉で書くことが大事。中学生レベルでも理解できるようなもの、専門用語を完全に避けるのではなく、専門用語に必ず説明をつけること。

- ユーザーを考えて、どのような情報を知りたいのか。どのように使われるのかについての説明が、特に工芸品にないことがよくあるが、これは非常に基本として考えるべきことである。
- この時点で良い例として一つ挙げたいのは、正倉院の英語のオーディオガイド。正倉院展の解説は作品を細かく説明するので、それに沿ってオーディオガイドも物をよく見るように書かれている。また、1から最後まで英語図録を作る人がオーディオガイドの全ての監督をしているという事情もあるのだろう。
- 次に問題点。これはおそらく日本の担当者はなかなか気付きにくい点があるが、私が聞いてきたものでいくつか例を紹介したい。
- 日本人向けの情報と外国人向けの情報は、必ずしも同じものでなくてよい。例えば「建盞（けんさん）は唐物天目である」という解説が日本語の解説にあっても、天目は分からない、唐物は分からない、茶碗は何のために使われているものか分からない外国人に、さらに建盞という専門的な言葉をあえて訳さなくともいいのではないかということ。
- 解決方法として、中身を全く違うものにすればいいのではないか。翻訳をせず最初から英語のネイティブの専門家に書いてもらうか、翻訳者に翻訳してもらうとしても翻訳者に広い裁量を与えること。
- また、日本語は単数複数、女性男性など非常に曖昧な表現が多いが、英語はこれをはっきりさせなければならないので、オーディオガイドで間違いがあると非常に目立つ。例えば「胴に野菊の文様を鉄砂で描いた壺です」というものを普通に訳せば「design of wild chrysanthemums」にしようと思うが、実際に見てみると1輪しかない、ということがある。テキストだけを翻訳者に渡すところのようなことが起きるので、写真資料を大量に渡さないとよい訳ができないということ。そもそもその人に最初から書いてもらえばこうした問題は起きないという点も、最初から英語で書いてもらった方がいい理由の一つ。
- 次に発音の問題。英語には振り仮名がないので、それぞれの言葉の発音を知らなければ読めない。解決方法として、よく分かる担当者がついている必要があるが、海外で収録する場合もあり難しい。また、日本美術の英語による解説には英語と日本語以外に、中国語・韓国語・サンスクリット語等の単語が頻繁に出てくる。収録にそれぞれの発音はよく間違えられる。

- さらに、翻訳者が日本語執筆者の書こうとしていることをよく理解していないとき、とにかく何か英語、横文字にして何とか分かるようにしたという場合は、いい英語にならない。
- 日本語では受動態がよく使われるが、英語の文章ではなるべく能動態の方がいい英語になる。
- 実際に日本語と英語でオーディオガイドを制作する際の工程について並べてみたが、黄色がよく抜けるステップ。英語のネイティブ編集者が、その翻訳原稿を英語から英語へ書き直すという作業は、いつもはなかなか入らない。オーディオガイド会社にチェックしてもらうが、その後に発音の問題が出てくる。本来であれば1回収録したデータを担当者が聞くべきだが、なかなかされずに納品される。
- 英語のオーディオガイドは日本語よりも工程が複雑なので、いろいろなミスが起こり得るが間違いは直しにくい。また、経済的な事業・文化・個人的な好みの違いもあり、必ずしも全ての外国人がオーディオガイドを購入するわけでもない。そして、有料のオーディオガイドに英語がきちんとあるにも関わらず、無料の文字情報、パネル等に英語がきちんとなければ、ある意味外国人への差別になる。外国人は解説のために余分にお金を払わなければいけないという、不公平なところがあるのではないかと思う。
- 結論として、良質なオーディオガイドを制作するには、業者任せにせず、信用できる英語ネイティブの専門家に執筆、編集、収録、最後のチェックの監督を依頼すべき。しかしその前に、無料で読んでいただける英語の文字情報を整えた方が楽で効果的ではないかというのが、個人的な意見。

【スミス委員】

- 翻訳者に資料を渡す際に、写真等多くの資料を渡した方がいいということには賛成だが、さらに写真ではなく実際自分の目で見た人の方が、よりうまい翻訳ができるのではないかと思う。
- 田辺ツーリズムビューローのブラッド氏は、数年間田辺市に住んでおり、自分の目でその地の文化を見て、吸収したから熊野ツーリズムビューローで成果を上げたのだと思う。

【落合委員】

- 境内の看板について、私が久能山東照宮に来たときにはやたらに看板があった。なるべく取り除き最小限にし、拝観料を払っていただいた方にはパンフレットを差し

上げている。

- オーディオガイドも入れているが、英語だけでなく日本語のものもある。英語の方は原稿を通訳の方に渡して訳してもらったが、最近検討したところ、私が見てもおかしいところがあるので、1度ネイティブの方にチェックしてもらった方がいいなという感じがしている。必ずしも英語だけではなく、日本語も結構借りていただいている。

【アトキンソン委員】

- お祭りやイベントの解説に関して、奈良と和歌山のホームページをチェックしたところ、長々と歴史が書いてあるのだが、参加できるのかできないのか、参加の仕方等が全く書いておらず、一般の人が入れない行事まで書いてあるものがある。入れない、見られないものの解説が書いてあるということがよくある。鶴岡八幡宮さんとの関係で気付いたことだが、所有者は建物の核から解説を書く傾向がある。観光客から見ると境内に入ってから順番なので、そういったことも工夫してもいいのではないかな。

【高野座長】

- 文化財としての情報提供と、観光サービスとしての情報提供というのは重なっているものの少しずれているということ。日本遺産なども、個別の案件ごとに物語をためて、それを届けるようなコンテンツを企画し、提案もさせ補助金も出すということを行っているが、最終的に場所としてアクセスできるし、神聖性のようなものは失われない形でどのように届けばいいのか。そうした知見が日本遺産であれば日本遺産の活動を通じて蓄積されていくと、看板も整理され、自分が参加したいイベントの情報もきちんと取れて、しかしその場所としての文化的なものは失われていないで保たれていくことができればよいのではないかな。

- 観光部局と文化財保護部局との連携、外部の視点の取り入れという点に関してはどうか。

【スミス委員】

- 「外国人の方に協力していただき」に関連して、現在日本各地で現役のJETプログラム参加者を使ったモニターツアーを行っている。そのようなモニターの活用も考えていただきたい。

【高野座長】

- JETプログラムでたまたま来ている人の何人かが主導権を取り、自分が3か月住んで初めて分かったようなことを伝えるにはどうしたらいいかという議論をする場所も、単に自分たちの知識を深めるだけではなく、外国人でないと見つけられないような

必要な機能があると思うが、そのような活動につなげるととてもよいと思う。

【野田委員】

- 祭りの再生が、地方創生の一つ、コミュニティーとして活性化する一つの要素になると思う。一例を挙げると、安曇野では御船祭という祭が行われているが、参加するのは基本的に担い手である氏子であり、今地方からどんどん若い人がいなくなる中で、祭りが途絶えてしまっている神社もたくさんある。そのような場合に、氏子ではなくても参加できますよ、海外の方もどうぞということが発信できれば、担い手不足を解消する一助ともなるし、共同体の活性化にも資する。ネット社会だと情報の拡散するスピードは全然違うので、そうしたことを予算の中で自治体とうまく連携を取ってやっていくのも価値がある。実は公のパンフレット等とは別に、そうしたネットを使った口コミの形で日本の文化が、祭りへの参加募集を通じて祭りの解説、文化の説明が自律的に拡散していく効果、このようなものを狙うのもおもしろいのではないか。

【村田文化財部長】

- 祭り等の情報提供の在り方について、祭りは話に出たように本当に様々で、特にいつやっているのか、参加者はどのような方かという情報は、地元の方々からすれば当然の前提だが、情報提供としてこれからの課題だと思う。
- 祭りによっては、地域外からの参加も歓迎したいところがあり、そのようなところは確かにいろいろな媒体を使って情報提供をすることが、PRになるということもある。
- 観光部局との連携ということになるだろうが、できるだけそのような祭りは、文化財になっているものもあればなっていないものもあるが、どのような形で必要な情報、関心を持っていただけるような情報提供ができるか、少し考えてみる必要があると思う。

【スミス委員】

- 自治体国際化協会にも、このようなパンフレット作成などの事業に活用できる助成金制度があるので活用していただきたい。
- 有用な人材のリスト化に関連して、田辺市ツーリズムビューローのブラッド氏のことにも触れたい。ブラッド氏のようにとても優秀で日本文化に精通している元 JET 参加者はたくさんいると思うが、自治体、社寺関係者に提供できるようなリストがあればすぐ提供したものの、現在あまり元 JET 参加者の連絡先や現職を把握していない。今年 JET プログラムが 30 周年を迎えるので、最優先で対応したい課題。

【アトキンソン委員】

- 解説や音声ガイドの製作を国が支援するというのであれば、文化庁で根本修理を150年に1回、途中の修理を30年に1回するときに、せっかくいろいろな専門家が集まり、修理をする人で専門的な知識を持っている人が集まっているはずなので、修理の際に新しい発見をするということは毎回あることだと思う。同時に、リフレッシュする必要もあるのだから、できれば修理のときに多言語対応もできるようなことをやった方が、観光立国ということを考えればいいタイミングではないか。使ってくださいというだけではどのくらい実際に活用されているのか分からないが、修理の設計監理等々のタイミングに合わせて、原則そこで整えていった方がいいのではないかな。

【村田文化財部長】

- 特に建造物で大きな修理をすると、必ず新しい発見、面白い発見がある。大きなお金をかけて修理をした結果得られた知見なので、そのようなことを外国の方を含めて知っていただくのは非常にいいことだと思う。自治体がせっかくお金をかけて修理したのであれば、その成果をどんどんPRしたいという気持ちはみんな持っているのだから、うまい形でそのようなことに結び付けていければいいと思う。

【アトキンソン委員】

- 報告書を書いたり、シンポジウムをやるなど一過性のもので終わってしまうことが結構あるが、観光のための資料として残すのは非常に大事なことです。現場で知ったことはたくさんあるのに、先生と一緒に消えていってしまう、という残念なことがたくさんある。埼玉県の大宮さんさんの場合、修理をしている最中にはいろいろな人が集まってきているので、そのときに限り、しかもただでできる。別の機会に来てください、全部解説してくださいということになると時間もかかり、1回では済まないこともある。修理が始まる時に合わせて、英語解説など観光客のための解説を事業の一つとして取り入れるのがよいのではないかな。

【萩村委員】

- 通訳案内士としては、常に現場にあるものには確かにお連れして説明できるが、一過性のもの、祭りなどのイベント的なものに、実は外国人のお客様たちはとても興味がある。例えば高山だと高山祭があるが、祭りで使われる屋台を展示している施設がいくつかあり、こんな立派なものを日本は昔から作っていたのかと皆さん喜ばれる。これがどのように実際使われて、祭りでどのように観客が喜ぶのかなど、実際に見たくなる。施設によってはビデオを準備しているが、一過性のイベントのようなものについては、DVDやCDで、これはツアーで貸切りバスの中でお客様に見せてよいか、そのようなものが支援していただけたらいいと思う。
- 山梨県立の富士山ビジターセンターというところで、富士山が世界遺産になったと

きに、富士山のビデオをいろいろな言語で解説したものを無料で配ってくれて、バスの中でどうか見せてくれと言われた。著作権の関係があり、バスの中で本当は見せたいものをどうしても見せられないが、国から公的に見せてよい、ぜひ見せてくださいと言われれば喜んで私たちも見せたい。

- 例えば白川郷の合掌造りの民家は、茅葺きの取り換えを40年、50年に1度しか行わない。それをビデオで見たお客様はすばらしいという。そのようなものが、自分の言語で見られればすばらしい。何か国や地方自治体の方で、やっていい、見せていいという教材的なものがあるとすばらしいと思う。

【高野座長】

- コンテンツの発信のライセンスについては、今メタデータのものはオープンでないのではないかという議論を内閣官房のほうでもやっているが、文化財については1歩踏み込んで、例えばこのように作られたものについてはCC BYのような、どこで作られたものを参考にしてこれを作っていますということさえ断れば、商用も含めていろいろな形のプラットフォームで、ここで作ったものが広がっていくとすばらしいなと思う。

【平岡委員】

- 祭りにはフェスティバル的なものとリチュアル的なものがある。東大寺の場合、リチュアル的なものが多いので、一般に公開することはできない。
- 自発的に行動するための必要なサポートを本当にいただきたい。たとえば奈良県であれば、奈良国立博物館には組織としてアドバイザーがいるが、東大寺、法隆寺、興福寺等の各寺院に対して、全体アドバイスをしていただける人が欲しい。お寺にはそのような人がいないので、とりあえず南都仏教としてまとまった組織であれば、国や地方からの援助を得やすいのではないかと思う。

【落合委員】

- 私どもは重要文化財になっている文化財のレプリカを結構作っている。家康公の時計のレプリカを作り、スペイン大使館や千葉県の御宿などに寄贈した。レプリカの持つ情報量も非常に大事だと思う。そのようなものを文化財に準じた補助対象にしていればありがたい。

【岩橋委員】

- 解説の改善・充実のための取組と進め方という項目を拝見すると、教育という視点が抜け落ちているように思う。今外国人観光客が来ているので、今日、明日にでもできれば対応したいという気持ちはよく分かるが、都合よく人材が見つかるわけで

もなければ、都合よく急に外国人向けの解説ができ上がるわけでもないと思う。

- いろいろな大学で、観光何とか学部とか、学科がたくさん作られているにも関わらず、そのような人材が輩出されていないという現状を考えると、もちろん外国の方々に日本のことをよく知っていただいて、このような事業を手伝っていただくのは有効な手段だと思うが、日本人自身もそのような教育に力を入れていただきたい。
- 自分自身の国のことを日本語でまともに説明できないのに、なぜそれを外国人に頼って説明しようと思えるのか。非常に長期的な戦略になっていくと思うが、教育に対する注力というような視点も盛り込んでいただきたい。

【高野座長】

- インターンのようなものを、本物の文化施設なり寺社なりが期間を決めて受け入れていただくことによって、学ぶきっかけになったり、アカデミーでもう少し深めてみようかとか、そういうことにつながっていくのかもしれない。
- 今、大学や、たぶん美術館、博物館は少しインターン制があるが、文化財の発信を真剣に考えるところについては、そのようなことを進めていくのもありか。

その後、事務局から連絡事項の後、観光庁と文化庁両部長から挨拶。

以上

別紙 第3回会議 出席者一覧（敬称略・50音順）

<委員>

小西美術工藝社 代表取締役社長 デービッド・アトキンソン

神社本庁 教化広報センター 広報国際課長 岩橋 克二

自治体国際化協会 JETプログラム事業部 プログラムコーディネーター エリック・スミス

国立情報学研究所 コンテンツ科学研究系教授 高野 明彦

全国社寺観光連盟 理事 野田 博明

日本観光通訳協会 会長 萩村 昌代

東大寺 執事長 平岡 昇修

京都市 産業観光局 観光MICE推進室 受入環境整備係長 内町 敏孝 （代理）

京都国立博物館 フェロー国際交流担当 マリサ・リンネ

<文化庁>

文化庁 文化財部長 村田 善則

文化庁 文化財鑑査官 齊藤 孝正

文化庁 文化財部伝統文化課 課長 大谷 圭介

<観光庁>

観光庁 観光地域振興部長 加藤 庸之

観光庁 観光資源課 課長 長崎 敏志

観光庁 観光資源課 ニューツーリズム推進官